

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節祈禱会

小キリスト

――イザヤ書第41～45章、コリント後書第4章――

1978年12月24日

小池辰雄

20世紀の文化文明 イエスは天蓋孤独 汝はわが僕（イザヤ41） わが霊を与えた（イザヤ42）
 汝おそるるなかれ（イザヤ43） 汝の罪は雲散霧消（イザヤ44） キリストはわが中に（イザヤ45）
 祈り

【イザヤ41】

⁸然どわが僕イスラエルよ、わが選めるヤコブ、わが友アブラハムの裔よ。
⁹われ地のはてより汝をたずさえきたり、地のはしよりなんじを召し、かく
 て汝にいえり、汝はわが僕、われ汝をえらみて棄てざりきと。¹⁰おそるるな
 かれ、我なんじとともにあり、驚くなかれ、我なんじの神なり、われなんじ
 を強くせん、誠になんじを助けん、誠にわがただしき右手なんじを支えん。

【イザヤ42】

¹わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、我わが霊をかれにあ
 たえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。²かれは叫ぶことなく声をあぐる
 ことなくその声を街頭にきこえしめず。³また傷める蘆をおることなくほの
 くらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。⁴かれは衰えず喪膽
 せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。

【イザヤ43】

¹ヤコブよなんじを創造せるエホバイま如此いい給う。イスラエルよ汝を
 つくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじ
 の名をよべり汝はわが有なり。²なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん、
 河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ、なんじ火中をゆくとき焚
 かるることなく焰もまた燃えつかじ。……⁴われ見てなんじを宝とし尊きも
 のとして亦なんじを愛す。この故にわれ人をもてなんじにかえ民をなんじの
 命にかえん。⁵懼るるなかれ我なんじとともにあり、我なんじの裔を東より
 きたらせ西より汝をあつむべし。

【イザヤ44】

¹されどわが僕ヤコブよわが撰みたるイスラエルよ今きけ²なんじを創造



しなんじを胎内^{はらのうち}につくり又なんじを助くるエホバ如此^{かく}いたもうわがしも
ベヤコブよわが撰^ひみたるエシユルンよおそるるなかれ³われ渴けるものに水
をそそぎ乾^ひたる地に流れをそそぎわが霊^{みたま}をなんじの子輩^{こら}にそそぎわが恩恵^{めぐみ}
をなんじの裔^{すえ}にあたうべければなり……⁶エホバ、イスラエルの王イスラエ
ルをあがなうもの万軍のエホバ如此^{かく}いたもうわれは始^{はじめ}なりわれは終^{おわり}なり
われの外^{ほか}に神あることなし……⁸なんじら懼^{おそ}るるなかれ憎^{おの}くなかれ、我いに
しえより聞かせたるにあらずや、告げしにあらずや、なんじらはわが証人なり、
われのほか神あらんや、我のほかには譬^{いわ}あらず、われその一つだに知ること
なし。……²¹ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ、汝はわが僕なり、
我なんじを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。
²²我なんじの愆^{とが}を雲のごとくに消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。
なんじ我にかえれ、我なんじを贖^{あがな}いたればなり。

【イザヤ45】

¹⁴……なんじのまえに伏しなんじに祈りていわん、まことに神はなんじの中
にいませり、このほかに神なし一人もなしと。¹⁵救いをほどこし給うイスラ
エルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。

【コリント後4】

³もし我らの福音おわれ居らば、亡ぶる者に覆^{おお}われおるなり。⁴この世の神
は此等の不信者の心を暗まして、神の像^{かたち}なるキリストの栄光の福音の光を照
らさざらしめたり。⁵我らは己の事を宣^のべず、ただキリスト・イエスの主た
る事と、我らがイエスのために汝らの僕^{しもべ}たる事とを宣ぶ。

●20世紀の文化文明

コリント後書4章3節、

「³もし我らの福音おわれ居らば、亡ぶる者に覆^{おお}われおるなり。

パウロが「我らの福音」といったキリストの福音が覆^{おお}われているならば、それは「亡ぶ
る者に覆われ」ている。この亡びゆく20世紀に覆われている。私たちには、福音は露^{あら}わで
あります。

⁴この世の神は此等の不信者の心を暗まして、神の像^{かたち}なるキリストの栄光の
福音の光を照さざらしめたり。」(コリント後4・3・4)

正にその通り。今この20世紀の文化文明は――サタンは20世紀の文化文明の姿をもつてい
る――神のすがたなる、福音の顕現者なる、キリストの栄光の福音の光を照らさざらしめ
ている。しかしながら、この20世紀の文化文明の姿をもって、いろいろな現象において現
れているサタンの相^{すがた}、これに負けてはいかん。敵は幾百万ありとも、



「百万人といえども我ゆかん」

と孔子が言いましたが、孔子の道德の世界でも、「敵が」百万人であつても私は行く」と孔子は道を踏んでゆずらない。孟子も、

「惻隱の心なきものは人に非ざるなり」

という。思いやり、愛の心がない者は人ではないと。この孔孟の教えも、また日本の先輩たちのいろいろな儒者たち、また仏教の第一流の坊さんたちの、これが全うされる。旧約的なものが本当に新約をもつて全うされる。これはただキリストだけです。キリストの栄光の福音だけです。

牧人に天界から光をもつて現れてきた。

「天には栄光あれ」

ではなくて、

「栄光が現れた」

という完了のことから、「在れ」という願いにはなりますけれども、あそこには動詞はない。キリストの光が、神の光が、この嬰兒みどりごにおいて実は、隠されて顕れた。私は今日、「小キリスト」と書きました。キリストは正に、ベツレヘムに生まれたイエスは「小さき神」なんです。イエスはこの小さき神として現れたが、現れたことが躓きであつた。顕れたことが隠れたことで、皆にはわからない。しかし、その時は星が輝いた。天使が現れた。そのことはわかった。この小さき神である嬰兒が徴であるということは、見える人には見えなくても、そうでない者には隠されていた。イエスがあれだけの言葉を発し、あれだけの業わざをなしても、親しい人たちには躓きであつた。だから、イエスはナザレから出てしまった。

「預言者はその故里ふるさとに容れられざるなり」

という。私はとにかく、まあ74、75年になりますが、歓迎されないんだね、私という人間は。学校でも、

「よし、小池校長に私はついて行こう」

というのがいるんでしょうかね、いったい。東大にいてもそうです。東大生は頭はいいけれども、本当についてくる人がいない。かつて2、3人いたかもしれないけれども、今はこの中にいないでしょ、東大出身は。京都大学の方は幾人もいらつしやる、奥田君の集会には。奥田君は人望があるせい何か何かしらんが。まあ私によってひっくり返された人が多いわけですから。

しかし、どこへ行つても私はそんなに歓迎されない。人柄は悪くはないんですよ、私はちつとも。悪くはないけれども、ダメなんだ。

「ちよつと、あれは……」

ということになってしまう。やっぱり、都会人というのは本当に福音を受けるのは難しいね。



いろいろな意味で誠にだんだん不如意であります。また無教会からは除^のけ者にされ、教会の人も

「あの幕屋なんていつているのはちよつと……」

なんてなわけで。とにかく、だんだん独りになる。けれども、ここにいらつしやる皆さんはかけがえのない友人たちです。

●イエスは天蓋孤独

私の先生の藤井先生というのがやつぱり孤独だった。同じ無教会にしながら、藤井先生はやはり孤独の人だった。内村先生とも喧嘩してしまった。まあ十字架でかろうじて握手はしたけれどもね、終わりにには。しかしもちろん、人間的な意味で多少くいちがっても、無教会にはとにかく十字架は立っていたから。

内村先生はあれだけの人物ですから、内村先生が仆れた時は藤井先生は――内村先生の告別式で――藤井先生は胃潰瘍ですよ、青黒いような顔していた。寢床から起きてきた。

「ダンテはまるで地獄から来た人のようなうだ」

とダンテのことを言つたというが、藤井先生が内村先生の告別式に來た時には、本当に何か陰府^{よみ}のくからやつて來た人のような顔している。けれども、その言葉たるや本当に全身から迸るような棄身の言葉でした。

「我々は、内村先生のこの告別式は新しい戦いの始めである。先生の屍^{しかばね}体^{たい}を乗り越えて

進んでいく」

なんてなことを言つた。そして屍体^{しかばね}を乗り越えて進んで行つた藤井先生はそれから3、4か月で、黙示録の講義を終えてちょうど2週間にして仆れてしまった。

私には、藤井先生は黙示録より始まり黙示録で終わつた先生です。黙示録の22章を一番先に聴いた。一番後に聴いたのがまた22章です。全くおかしい「ふしぎだ」よなこれ。

「我は始めにして終りなり」

というが、「終りにして終りなり」というわけ。

とにかく、だんだん孤独に、人から容れられなくなればなるほど、いよいよもつて逆に力^{ちから}がくる。人間的には寂しさもあるでしょう。けれども、百人のひとに退けられるよりも、キリストと一緒にある独りの人と共の方がよっぽど楽しい。そういう、あなた方一人びとりは、「友垣^{ともがき}」というのは正にキリストをいう。イエスは本当に天蓋孤独、ただ神とのみ。この小さき神、嬰兒イエスは――この地上の生涯はたつた33年とか30年とか、とにかくワシジェネレーションしかないんだ、地上に――大変なひとですよ。それでこれだけ権威のある言葉を発し、ケタちがいな業^{わざ}をなし、神を証して、

「我を見し者は父を見しなり」

と。もう降参しないでどうするんですか、このキリストの前に……（異言）……。このキリスト



の前に降参してもう全身が「火の如くなる」。今度『活かすキリスト』誌〔第155号、1979年2月号〕の巻頭に、

「我は火を地に投ぜんために来たれり」

というドイツ語の文章をのせた。これは正月の最初の句です。キリストはいつたい地上に何をしに来たかとおもったら、火を投ぜんためにいらつしやった。

「平和ではない、本当の争いだ、戦いだ。神の国を現すための戦いに来た。

わが弟子とならんものは己を棄ててかかれ。己を憎まずばわが弟子となることができない。おのが十字架を負って我に従え」

と。私は、

「わが心定まれり」

と、もううれしくてしょうがない、キリストのこういう烈しい言葉が。やはり福音は本当に烈しいものだ。それでなければ戦いできません、いい加減なことでは。

私は来年、学校を出る。もう一切、獨協から去ります。そして、私は本当に野人となります。在野の人となります。いつ飢え死にしてもいいよ。それだけの覚悟でやります。キリストの私は弟子です。もうこの世と妥協なんかしてられない。

私の兄貴は私のために27才で生命をすてた。あの兄貴に生きてもらいたかった。私よりかあらゆる点で優れた兄貴です。この兄貴に應える言葉がないよ、私がこれから本当に棄身でやらなかったら。ただ「獨協〔から去る〕」と言っているのではない。私は教育界を棄てるんです。はつきり福音の世界です。もう自覚ならざる自覚を賜っています。私は今年の秋に二度示しが来ている。日まで覚えています。そういうことで、アナテマ魂です。

「キリストに呪われても私はこの福音を〔伝える〕」

とパウロが言いました。パウロは本当になんと福音を愛するか、キリストを愛しているか、この逆語的な言葉は。もう20世紀の今は地獄ですよ。いつ審判が来るかわからん。いつわりの繁栄なんていうものは、

「空の空なるかな、すべて空なり」

というもの。

「⁵我らは己の事を宣^のべず、ただキリスト・イエスの主たる事と、我らがイエスのために汝らの僕^{しもべ}たる事とを宣ぶ。」（コリント後4・5）

パウロははつきりと自分の存在と使命を言った。「主さま」というなら、「私は僕である」ということ。僕である自覚がなくて、「主さま」と呼んだら偽りになる。皆さんは何をなさっているにいい。しかし主の僕であることが皆さんの本質でなかったら、偽りになる。

●汝はわが僕（イザヤ41）

旧約に「小キリスト」がいました。イザヤ書を開いてください。41章8節、



「⁸然どわが僕イスラエルよ、わが選めるヤコブ、わが友アブラハムの裔^{すえ}よ。
⁹われ地のはてより汝をたずさえきたり、地のはしよりなんじを召し、かく
て汝にいえり、汝はわが僕、われ汝をえらみて棄てざりきと。
皆さん一人ひとりへの、神さまの呼びかけと思つて読んでください。」

¹⁰おそるるなかれ、我なんじとともにあり、驚くなかれ、我なんじの神なり、
われなんじを強くせん、誠になんじを助けん、誠にわがただしき^{みぎのて}右手なんじ
を支えん。」(イザヤ41・8～10)

神さまの言です。人間の約束ではない。キリストの言です。全部、「我」は「キリスト」として読んでください。キリストを主とするものは、このようにして選ばれ、このように棄てられず。讃美歌の中にある、

「人は棄つれど、汝は棄てず」

と。もうキリストに依頼^{よりたの}む。私は時々、さつきもそうだ、あそこ(柱)によりかかつて讃美歌を歌っていた。私は寄りかかるのは、キリストに依^よりかかつている。くたびれたから寄りかかつているのではない。

第二イザヤは正に「小エホバ」です。第二イザヤのこのエホバの言をキリストの言とすれば、私たちは第二イザヤのように「小キリスト」なんです。「僕」が本当に小キリストとなる。「子」という自覚はヘタすると甘える。「神の子」という。「僕」となると、これは甘えていられない。人間はもちろん僕だけでは続きません。ときどき、子として甘えなければなりません。けれども、神の子と神の僕。愛と義。この画面は私たちの存在そのもの。信仰における存在そのものはキリストのゆえに、贖いのゆえに、私たちは神の子です。「アバ、父よ」といつて呼べる。「お父さま！」と祈れる。

「主さま！」と祈れる。これは、「僕」は即ち義の貫いているすがたです。

「子」は即ち愛が包んでいるすがた。キリストのふところの中に入るときは「子」です。祈り入る方はこの「子」だよ。祈り入ってまず子になってもらおう。結構です。嬰兒^{みどりご}。祈り入って父の、キリストのふところの中に入ってしまう。ものすごい生命の世界、力の世界です。そうしたらば、懐からこんどは出てもらおう。そして、本当に御前に平伏して、「僕」となつてこんどは戦う。

「汝の御意^{みこころ}を成させたまえ」

というのは、この僕の方だ。神の子キリストは常に「汝の御意を成させたまえ」と、僕の姿で動いていた。そうですよ。

「どうぞ、お使いください」

と、全身を挺身しているんですよ、棄身でかかっているんですよ。聖霊を受けたキリスト者は、男も女も、それだけのものなんです。それ以下ではない。



●わが霊を与えた（イザヤ42）
イザヤ書42章、

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、我わが霊をかれにあたり。」

「我わが霊を汝にあたえたり」と。「彼」なんて三人称で読んでいたらダメですよ。キリストが私たちに、あなた方、我々一人びとりに、

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、我わが霊を汝（かれ）にあたえたり」と言われる。

汝（かれ）、異邦人に道をしめすべし。²汝（かれ）は叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。³また傷める蘆をおることなくほのくらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。

と。「真理をもて道を」とは何ですか。真理も道もキリストではないですか。人間的な「真実」ではないよ。

「わが真理をもてわが道を示さん」

ということですよ。みな「わが」を付けてください。観念的に「真理」なんて言っているのではない。

「わが真理をもてわが道を示さん」
「はい、アーメンです」と。

⁴汝（かれ）は衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。」（イザヤ42・1～4）

しょうがないね、第二イザヤも私にぶつかってしまったら。私ではないよ、わがうちなるキリストの霊だよ…（異言）…

●汝おそるるなかれ（イザヤ43）

イザヤ書43章、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ。」

しよつちゆう

「おそるるなかれ」

です。あの天使がマリヤに現れた時にもみんなこの「おそるるなかれ」で出てきた。

「なにも恐がることはないぞ」

と。私みたいな生まれつき臆病者には非常にありがたい言葉です。臆病者で泣き虫で、私の孫の龍一が私に似ている。優しい子だよ。私もあのように優しくかった。女の子の方が強い。



暗闇には私は行かれないで、私の妹の方がサツサツと行つた。

「お二階へ行つて取つてきてくれ」

なんていわれても、私はちよつと行きかねていると、愛子という妹がサツサツと行つた。そういうダメな野郎です、私は。ダメな野郎だから神さまは捕まえてしまったね。愛子も9才で仆れてしまった。私の身内はみんな天界へいつてしまったから。

我なんじを贖^{あがな}えり。我なんじの名をよべり汝はわが有^もなり。^{みづのなか}2 なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん、河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ、なんじ火中^{ひのなか}をゆくとき焚^やかるることなく焰^{ほのお}もまた燃えつかじ。

聖霊の世界はこのようなことだね。手島さんのグループでは時々やるけれども「火渡り、滝浴び」。モーセが紅海を渡るときに水が分かれてしまった。そのようにして、神さまに、キリストに守られ、「既に贖いたり」という完了をもつて、恩寵の完了をもつて、いつもこの恩寵の現実を与えながら進んでくださる。

「小キリストならざるを得ず」

ということ。「小キリストたるべし」ではない。小キリストにされていくんです、我々一人ひとりが。

「キリストの証者」

ということを別にこの「小キリスト」といつているだけのはなしだ。キリストの証者を「小キリスト」というとなお直接的な言葉だから。躓いたら困るよ。

「おれは小キリストになつた」

なんていい気になつたら、とんでもない。今度は小サタンになつてしまう。

霊の世界は常に

「無者」

でなければダメです。この「無者」という言葉が本当につかめていますかね。完全な逆説的な自己否定ですから。藤井先生が時々私たちに言つた。

「君たち、死んでいるかね？」

と。「死んでいるか」ということは、

「本当に十字架を受けとつて、死んで、そしてキリストに生きているか」

ということを生先生は「死んでいるか」と言つた。私の言葉では「無者」になるけれども。ただ無教会では——その気合はいいんです、気合は非常にいいんだが、気合だけではダメです——やはり聖霊なんです、そこが「欠けている」。なにも藤井先生のことを言っているのではない。無教会にはなかなかいい気合があつたです、正直。けれども、それが本当の聖霊のところまではちよつとまだ不徹底だつた。

⁵ 懼^{おそ}るるなかれ我なんじとともにあり、我なんじの裔^{すえ}を東よりきたらせ西より汝をあつむべし。」（イザヤ43・1～5）



イザヤ書43章のこの始めの数節は素晴らしいところです。何という預言書かと思うよ、この第二イザヤというのは。こんな文字はちよつとないね、本当に。

● 汝の罪は雲散霧消（イザヤ44）

イザヤ書44章です。

「¹されどわが僕ヤコブよわが撰^{えら}みたるイスラエルよ今きけ²なんじを創造しなんじを胎^{はら}内につくり又なんじを助くるエホバ如此^{かく}いたもうわがしもべヤコブよわが撰^{えら}みたるエシユルンよおそるるなかれ³われ渴けるものに水をそそぎ乾^ひたる地に流れをそそぎわが霊^{みたま}をなんじの子輩^{こら}にそそぎわが恩恵^{めぐみ}をなんじの裔^{すえ}にあたうべければなり

「水をそそぐ」というと、み霊と恵みと全部同じことを別な言葉でいつているだけのなし。み霊が恵みであります。水はみ霊であります。8節、

なんじら懼^{おそ}るるなかれ懼^{おそ}くなかれ、我いにしえより聞かせたるにあらずや、告げしにあらずや、なんじらはわが証人なり、われのほか神あらんや、我のほかには磐^{いわ}あらず、われその一つだに知ることなし。

この「われ、われ」はみんな「キリスト」と思つて読んでくださいよ。預言なんだから、これはみんな「キリストの」。だから、

「汝らはわれキリストの証人である」

と、新約の光でみんな読んでしまう。その次に愉快な言葉が出てくるよ。21節、

²¹ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ、汝はわが僕なり、我なんじを造れり、なんじわが僕なり、

「僕、僕」と畳みかけて言つて、ここは「エホバの僕」の交響楽みたいところです。

イスラエルよ、我はなんじを忘れじ。

と。私は忘れっぽくて皆さんの名前を忘れて申し訳ないけれども、神さまは忘れない。

²²我なんじの愆^{とが}を雲のごとくに消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。

なんじ我にかえれ、我なんじを贖^{あがな}いたればなり。」（イザヤ44・1～22）

「贖つたから帰つて来い」

という。「帰つたら贖つてやるよ」ではない。

「もう贖つたから、帰つて来なさい。充分よろこんで帰つて来れるだろう！」

と。本当にその通り。恵みだから。キリストは贖つてくださったから、私たちは帰入・祈入、帰り入り祈り入ることができるんです。

これから祈禱会だけでも、もうキリストの中に入ってしまったて、ここが天国みたいに なつてもらいたい。もう天界にいつてしまう。武蔵野ではなかったなんて。み霊の現実 はどんなことになるか。この中の誰か、身体が軽くなつてしまつて少し浮き上がったらい



だろう。なにもふしぎなことを私は求めているのも何でもないが。

「雲散霧消」

という言葉があるが、これが正に雲散霧消なんだ。雲消霧散、雲と消し霧と散ずると書いてある。

「我執なんていう罪は全部もう消してしまったよ。われ汝を贖った。だから、帰って来い」

「はい、もう帰らずを得ません」

と。帰り行くことが前進である、と言いました。

●キリストはわが中に（イザヤ45）

イザヤ書45章14節後半、

「¹⁴……なんじのまえに伏しなんじに祈りていわん、まことに神はなんじのうちにいませり、このほかに神なし一人もなしと。……¹⁵救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。」（イザヤ45・14）

ルターの好きな言葉です。

「デウス・アブスコンデイトゥス (Deus absconditus)」 「隠れている神」

という言葉です。私たちの中にキリストが隠れていますか。

「わがうちに隠れています主よ」

と。だから、ペテロもパウロも、

「我を見よ。わがうちに隠れていますキリストを見よ。ナザレのキリスト・イエスの名によりて歩め」

と言った。ペテロもパウロもヨハネもみな「小キリスト」であつたんです。

「まことに神はなんじの中にいませり」

「まことにキリストはなんじの中にいませり」

「まことにキリストはわがうちにいませり」

だよ。いいですか、ここは大事なところだ。言葉は全部、現在化し、一人称化して読むんです。それが聖書を本当にまともにもぶつかっている読み方なんです。三人称ではダメだよ、

「ああそうですか」

なんてなことになってしまう。内容は、我自身にかかわっているんだ。キリストは、

「汝自身に私は言っているんだぞ」

と言っておられる。おわります。

●祈り

私がつ先に祈りますから、あと自由に祈ってください。



主さま。74年間、まことに申し訳ないものでございました。しかし、あなたのご恩寵は私の如何にかかりありませんでした。本当に感謝いたします。あなたは私たちのためにこの地上に降臨され、「小さき神」として現れたまい、ふしぎなことが起き、青年になつては、ヨルダンでもつて洗礼のヨハネからバプテスマをうけ、しかしそれは、あなたは直接に神さまからバプテスマされ、聖霊がきたり、曠野に呼び出され、サタンと一騎討ちをなし、本当に神さまの勝利を勝利となさり、神さまのご栄光をその権威ある御言をもつて、そのケタちがいな御業をもつて、現し給いました。地上に天国を現じつつ歩き給いました。しかしながら、そのことが目明きであるところの目くらにみんな躓きとなりました。ついに弟子たちも散りました。あなたは贖罪の十字架にかかり、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

と、誰も叫ぶことのできない叫びを発し、

「しかし、彼らをゆるしてやってください」

と。実に：（異言）：、驚くべき主さま、ご愛の主さま、感謝いたします。

「今にお前たちに聖霊を与えるぞ。祈って待っている」

と。弟子たちは心一つにして十日間祈り待ちました。俄然、火が天から降りくだりました。

「われ地に火を投ぜんために」

と。火が降りました。聖霊が降りました。彼らは本当に全身が火とせられ、

「これが本当にキリストの福音であつた」

と、弟子たちはみな小キリストとされ、この使徒行伝を、当時の地中海をあのようにしてパウロは伝道また伝道、実に諸々の筆舌に尽くし難き患難を突破してあなたを証しました。

新約聖書は驚くべき書です。こんな書はありません。また、この新約に向かって旧約の預言者たちが本当に身をもつて預言しました。今承った第二イザヤは、その最も驚くべき預言者でありました。

エホバの僕、神さまの僕、キリストの僕と、私たちは今この聖書を読みました。私たちはあなたの僕とせられ、いよいよ僕の自覚をもつて、またあなたの子としての深い交わり、深い生命、愛の中にあつて、この愛の力をもつて僕の実存をしていくたく存じております。あなたのご愛は驚くべき力をもっています。本当に一切を荷いあげていくところのものです。人々はみんな実は愛に飢えているのです。この愛を与えんばやみません。この愛を与えるのは、私たちの僕としてのその務めであり、ざるを得ません。主さま、私たちはいよいよそのような歩みを行かざるは、私たちは本当に生きていはいえません。この来るべき1979年を、私たちはそのような生命を生命し、道を道し、また光を光して、進んでまいります。かくして、本当に：（異言）：。この愛をどうぞ、主さま：（異言）：切に願ひ奉ります。兄弟姉妹たちとこのようあなたのご降誕を、あなたを迎え入れることができ、聖名をただただ感謝、讃美いたします。いま、心からの感謝と讃美、キリスト



の聖名により捧げ奉る。アーメン。

……………

主さま、ここに集まっている一人ひとり、またやむを得ずして先に帰った一人ひとり、また今日来れなかった諸所方々でこのときを覚えて、また遠くでは奥田君がドイツで覚えていますが、一人ひとりをつぎにならないあなたのご愛と御顧みをもつてかえりみていただきます。このようにして、私たちの中に本当の天来の火をくだし、私たちを本当にあなたの中に、あなたに生まれしめてくださって、感謝いたします。今橋君の伝道、また梅村君の円現塾の伝道、また針谷君の蔵における伝道、新しくいいよ展開せしめてください。また、三島における松井君の集会もどうぞあなたが祝福し、それぞれ、幕屋を張らし、また家庭集会もありますが、どうぞ、その家庭集会における、また

「一、三人わが名によりて集まるところにまた我もあり」

との実をいよいよあげていくことができますように。これはすべてうつて一丸、あなたの身体としての本当のエクレシヤを私たちが展開していくことができますように願ひ奉ります。この僕はまた人生のある峠にさしかかりましたが、来年のことは全部おゆだねいたします。

主さま、ただあなたの僕として、今、イザヤ書において読ましめられたこの親しき天来の書簡を、私はふところに入れて進んでいきます。兄弟姉妹たちと相助け、相祈つて「いきます」。今、この地上には希望はありませんが、しかし上から驚くべき希望がやってきて、感謝であります。また、本当にこの福音を、もはや私たちは福音せずにはいられず、このマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、この福音書、また特に20世紀の危機的においては黙示録の驚くべき音信を、どうぞ、神さま、これらのものを私たちの身につけていくことができますように願ひ奉ります。

今、尽くしませんが、心からの全存在の感謝と、また御前への平伏しと、また来年に対する祈りと、一切を主イエス・キリストの聖名によつて捧げ奉ります。アーメン。

